

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
橋本 克巳 かつみ かつみ	男 性	9 歳	名古屋市西区 (中宇利)

まんもうかいたくだん
「満蒙開拓団

しんく
終戦からの辛苦」

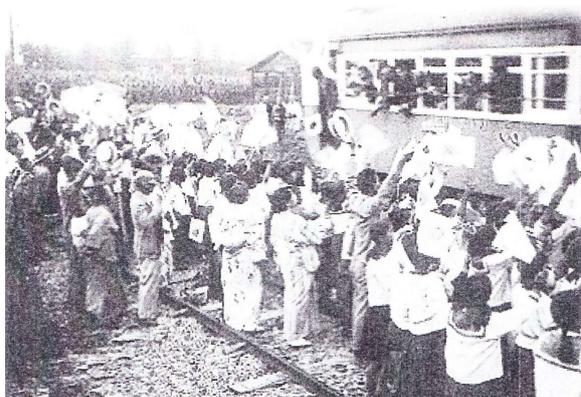
「東三河郷開拓団からの手紙」

及び取材による原稿

○ 満州をめざすことに

私は八名中学校第5回卒業生で、昭和10年生まれです。昭和17年（1942）頃だったと思います。私が小学校に入る前でした。中宇利の山田にあった家が火事で焼けてしまったこともあって、両親と祖母と弟二人、妹一人の7人家族で満州に渡ることになりました。親戚から反対されたそうですが、当時の国策として開拓が奨励されていたのが、決断の理由だったようです。子ども心に、故郷を離れることはさびしかったです。でも、長い旅行で名古屋から電車や汽車や大きな船に乗れることはとてもうれしかったことを今も覚えています。

満州は大連の港に着きました。それからまた、長い長い汽車の旅が始まりました。見わたす限りの大平原の中を何日もかかって、ようやく当時のチチハル市に着き、今度はトラックに乗って開拓団の村に着きました。当時の竜江省甘南県で、先発した開拓民が開いた「東三河郷」という集落でした。家は泥でできたような農家でした。間仕切りして何軒かでいっしょに住みました。オンドルといって、冬になると竈口で草（たきぎはありません）を焚くと、床がほかほかとしてとても暖かでした。今のホットカーペットのようでした。冬はとても寒く、零下30度以下になることもあり、寒いというより痛いと感じました。朝、顔を洗う時、金の洗面器にさわると一瞬にくっついてしまうことがよくありました。外は一面銀世界、見わたす限りの雪野原でした。防寒着も十分ではありませんでした。春の訪れが待ち遠しかったです。



満州へ 見送り 「満蒙開拓と歩み」より

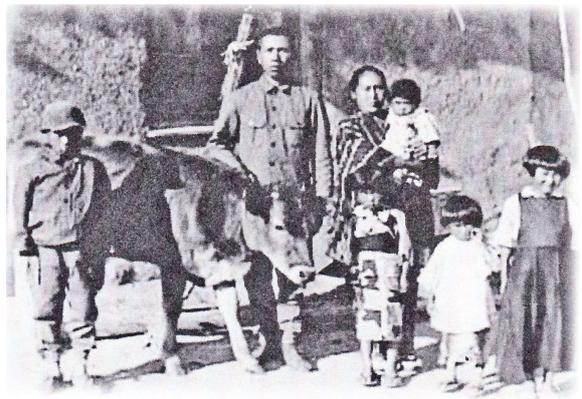
やがて雪が溶け、枯れ草に火がつけられます。一面火の海となり、あちらでもこちらでも炎が夜空をこがし、それはとてもきれいでした。そして焼け跡の黒い大地から色鮮やかな若芽が生まれてきます。待ちに待った春の訪れです。一番うれしく、楽しい季節です。でも、農作物の種をまく時ですので、一番忙しい時でもありました。

○ 開拓団での生活

昭和17年（1942）4月、私は国民学校に入学しました。毎日30分ほど歩いて通いました。児童は80人ほど、先生は3人いました。1年生だったので開拓の厳しさはあまり知りませんが、日本の農作業と違って大変のようでした。そんなことを父母が話していたことを聞いたことがあります。日本と違って広大な土地です。一つの畑の広いこと、こちらの畝の端からながめると向こうの畝の端が分からないほどの長さがありました。小麦、じゃがいも、トウモロコシなどを主に作っていました。

当時はよく分かりませんでした。その土地はもともと中国の人たちの土地で、日本の開拓公社がただ同然で取り上げたものでした。そのことは子ども心にも分かっていました。

だんだんと異国の土地にも慣れて、耕す畑も広がって我が家にも幸せの春が訪れました。妹も生まれて8人家族になりました。馬、牛、ブタ等も増えていきました。近くに住む中国人（私たちは満人と呼んでいました）の方々とも仲良くなり、共に農業を営んでいました。



入植者家族写真 「満蒙開拓と歩み」より

○ 男性は兵士にとられ

しかし、昭和20年（1945）になると大東亜戦争はだんだんときびしくなり、学校での授業も変わっていきました。食糧増産や植林等に時間をとることが多くなり、開拓団の若い人々が戦場へ次々と送られていきました。やがて父も呼び出され、兵隊にさせられてしまいました。関東軍は、南方へ転出した部隊の穴埋めするために、40万人の男子を根こそぎ動員したのです。開拓地から若い男の姿は消えました。父がいなくなった家はさびしく、一家の柱をとられて仕事の上にも大変なことでした。外灯も懐中電灯も提灯もない星明かりを頼りに本部のある所まで母と使いに行ったこと、とてもこわかったことをよく覚えています。

戦争はますます厳しく、戦局は不利になり、そのことが遠く離れた私たち開拓団にも押し寄せてきました。とうとう学校で授業ができなくなり、通学も危なくなりました。7月にはついに学校が閉鎖されました。なかよしの友だちとも会うことも遊ぶこともできなくなりました。

○ 終戦が悲劇のはじまり

そして8月9日、ソ連軍が国境を破って侵攻してきます。15日に日本が無条件降伏すると、開拓団の集落がおそわれ始めたのです。「匪賊」と呼んだ現地の人々は、子どもにも銃を突きつけ、金品や食料、家具、家畜も奪っていきます。多く

の男の人を戦場にとられ、老人と女の人と子どもばかりの集団です。なすがままに従うしかありません。周囲にある開拓団からもいろいろとうわさ話が流れてきて、とても不安でした。やがて私たちの開拓団も襲われるようになりました。そのたびに



作業のひとつ 「満蒙開拓と歩み」より

一人また一人と犠牲者が増えていきました。どこの国にも悪い考えを持つ人はいるものです。まして日本人が他国にむりやり踏み込んで土地を奪い、そこに住んでいる人を追い出したりしたのですから、憎しみや恨みを買うのは当たり前です。その人々が匪賊となって、夜となく昼となく押し寄せてくるのです。そのたびにお金や衣服、食糧等が持ち去られました。目の前で銃で撃たれて殺されるのを見ました。縛られて連れて行かれる人、全身傷だらけにされるほど拷問を受けた人、私自身も冷たい銃口を突きつけられたこともありました。

やがてソ連軍も来ました。戦車に乗った兵士の軍服はボロボロで、左足にも右足用の軍靴を履いている兵士もいました。ただ、所構わず発砲するマシンガンだけは黒光りして、手入れが行きとどいていました。ソ連兵も食料を求めました。残っていたものを少しずつ提供しているうち、2、3日に引き揚げていきました。東三河郷の人たちは、別の集落に移りました。

二転、三転、凍りつくような荒野を逃げ回り、住む所を変えました。食べるものもなくなり、着るものも1枚きりになり、身の危険を感じて暮らす毎日でした。

そんな時、11月ごろになってソ連軍に抑留されていた父がもどってきました。シベリアの収容所へ向かう輸送列車から脱走したと話しましたが、多くを語りませんでした。それでも花が咲いたように明るい気持ちになりました。しかし、それも長続きしませんでした。そこも匪賊に襲われました。東三河郷に一度もどりましたが、そこから南にあるチチハル市の日本人街に向かうことになりました。川が凍結するのを待ちました。その上を徒歩で歩くことができるからです。

○ 逃避行の末路

出発は21年2月、チチハル市までおよそ200kmの雪道を歩いていくことになりました。3家族くらいで避難しましたが、1日に歩ける距離は限られていました。厳寒期で零下30度にもなり、野宿は死を意味します。日が暮れる前に中国人の家に宿を求めました。オンドルに当たらせ、あわがゆをふるまってねぎらう現地の人もいました。しかし、ある集落で5、6人の若い男が草刈り鎌を持って待ち伏せし、取り囲まれました。髪を切り、男装をしていた17、8歳の娘さん2人を拉致していきました。小さな子をおぶっていましたが、ごまかせません

でした。殺すぞと脅され、2人を置き去りにするしかありませんでした。母親は声を出さずに泣いていました。お父さんは悲しそうに言いました。「今ごろ、おもちゃにされているわ。」と……。

2月の下旬か3月頃チチハル市に着きました。私の家は、満州で生まれた末の妹を含め、誰も落後しませんでした。現地の自治組織で、日本人が経営していた料亭兼旅館「吉野や」の空き家に収容されました。その収容所には、約500人が詰め込まれました。一部屋に40人ぐらいいたと思います。便所は空き地に長さ30mの穴を3本掘って板を渡したただけのもので、屋根も囲いもなく、男女の区切りもありませんでした。食料はコーリャンだけでした。現地の人も食べないニワトリのエサでした。それを食べるしかありませんから、柔らかく焚いて食べました。一家が安らかなひとときを過ごしましたが、それもつかの間、暖かくなると病魔に襲われました。不衛生きわまりない状況です。着替えのない服の縫い目にはびっしりとシラミの卵が並びました。シラミが媒介した発疹チフス、腸チフスなどの伝染病が収容所全体に流行しました。医者もいないし薬もありません。毎日2人、3人と死んでいきました。我が家でも体力のない祖母とすぐ下の弟、妹と相次いで死んでいきました。

昭和21年7月7日、父母が1時間違いながら、私と弟と妹を残して死んでいきました。「頑張らないかん。日本に帰ろうな。」と言っていた父でした。静かになった父の口に手をあててみました。息をしているか確かめました。1時間後には母も死にました。悲しみを通り越して、涙すら出ませんでした。今のように葬式はできません。破れたアンペラ(ゴザ)に遺体を包み、手足を荒縄でしばり、比較的元気な人が郊外の荒れ地に運び出しました。墓穴を掘る人もおらず、遺体はうち捨てられたと聞きました。お経をあげることも線香もお花もない、さびしいさびしいものでした。その時、私もチフスで生死をさまよっていましたので、窓からてんびん棒にかつがれていく父母の遺体をぼう然と見送りました。これからどうなるのか？頼る両親はもういません。それは言葉にできないほどの悲しみでした。同じ部屋に5家族ほどおりましたが、みんな同じで、一度病気になると死を待つより仕方がなかったのです。

タンポポの葉もゆでて食べましたが、栄養失調も重なり、やがて4歳の弟と2歳の妹が短い人生を終えました。かわいそうで哀れでした。目や鼻や耳からハエが生みつけた卵がウジ虫となっちはい出てくるのです。やれることは、ウジを取ってやることだけでした。死んでいくのを見ていることしかできませんでした。今度は運び出される遺体に付きそいましたが、父母が捨てられた場所には何も残っていませんでした。弟と妹の時はとても悲しかったです。かわいがっていたからでしょうか、今でも夢でうなされることがあります。

8人家族のうち私一人だけが残りました。戦争孤児となったのです。日本との

戦争は終わりましたが、中国内では国民党と共産党の戦争が始まりました。そんな折、孤児は全部かき集められて国内戦争に使われるとのうわさが流れました。不安にかき立てられましたが、幸いにもそれはなく、残留孤児にはなりませんでした。(家によっては、子どもを満人に預けて死んでいった人もあります。)

○ 日本へ帰国

皮肉にも、父や母や弟妹の死後1ヶ月後、日本に帰れることになりました。国連の要請により、日本人を送還するということでした。本当にうれしかったです。でも、もう少し早かったら……、と思わずにはいられませんでした。とても不安でした。これからどう生きていったらよいのか分かりません。それでも、同じ東三河郷開拓団の人のお世話になりながら、命からがら帰国することができました。両親の遺髪と爪を薬包紙に入れ、懐にしのばせて帰りました。これだけは持ち帰らなくてははいけないと、思っていました。

○ 故郷も安住の地ではなく

昭和21年(1946)10月、山吉田の開拓民、山口さんと一緒に引き揚げました。新城駅から歩いて帰ったことを覚えています。最初は中宇利の本家の橋本家にお世話になりました。その後、母の在所の大原に移り、比較的恵まれた環境の中で6年間お世話になりました。しかし、それでもその間には、いろいろな差別やいじめを受けました。戦争孤児と言われ、浮浪児、犯罪予備軍とまで言われ、胸が張り裂けそうな思いをしながら耐えました。なぜ、こんな辛い目にばかりあわなくてははいけないのでしょうか。

この戦争で多くの人が殺されたり傷ついたりしました。この目で戦争のむごさをいやと言うほど見てきました。銃殺された人、連行された人、虐待や暴行を受けた人たちが目に焼きついています。ソ連軍に追い詰められ、集団自決した開拓団もたくさんありました。何の罪もない人たちが戦争のために、地獄に突き落とされたのです。親が子どもを殺したり、家族に自決を強要したり、ありえない悲劇が起きたのです。すべて戦争が引き起こしたことです。どんなことがあっても、戦争のない世界にしなければならぬと、強く強く思っています。



引き揚げ港となったコ口島全景

飯山達雄著「敗戦・引揚げの慟哭」より